

エルサルバドルは中米の熱帯地域だが、小さな季節の変化を感じる瞬間はたくさんあった。季語のないものも多くあり、俳句とも和歌ともつかない稚拙なものも含まれているが、日々の仲間との交流が異国での生活の温かな拠り所となった。ここに住んだ軌跡として残そうと思う。

11月：落ち葉と花と新しい葉の共演。秋の気配。

「風吹きて 身震い一つ 秋の朝」
「サイレンに 息ひそめおり 交差点」
「カサコソと バスと並びて 枯れ葉走」
「風吹きて 晴れ渡りたる 日の出かな」
「濡れし道 落ち葉集める ほうきの音」
「華鳥月 よくぞ日本に 生まれけり」



「通勤路
強風と紅葉の
ダンス」

12月：クリスマス。

「雪降るか 白き電飾 クリスマス」
「みあぐれば 何処までも青き 冬の朝」
「冬の陽浴びて 青々とアボカド」
「南国の 祝いの空砲 聖夜かな」
「暖かい 聖なる夜に 空光る」
「まんはつの ひかりとおとに あいちかう」
「路静か 白き残骸 晴れわたる（花火の紙屑が散らばる情景）」



「雨上がり 朝日さす教会に 鐘のなる」

12月：年の瀬。

「セントロに 静かに響く 鐘ひとつ」 「カテドラル 歌うが如き 神父の声」
「窓に寄りて 喋るが如き 虫の声」 「年の暮れ 静けき朝の 鶏の声」
「掃除して 振り返りみる 年の暮れ」 「Pasen と 列を譲られ はにかむ我」
「冬夕焼け マリンバの音 宮殿前」 「木々の間に スプリンクラーの音ぞ 響きおり」

「刈草の香 祖父の自転車の荷台」
「年の瀬の エルサルバドル 桜咲く」
「ふと見上げ 蒼き空にや 年の暮れ」
「図書館で 遠くを眺め ひなたぼこ」
「北風よ 煤を払い 年暮るる」
「読み終えぬ 西語の頁や 年暮るる」
「年の暮れ 読み終えずとも 煤払い」
「頁めくる 楽しさもまた 年の暮れ」
「木々の音 ここは浜辺と 惑わされ」
「灯り消し 朝の気配を 楽しめり」

「風吹きて 故郷感じ 懐かしむ 遠州のカラッ風」



「見ぬ人に 我救われて 涙を流す（平生三郎公園にて）」

「年の瀬や metrocentro 賑やかに」 「年の暮れ rebaja の看板 あちこちに」
「風と木と 鳥の合唱 冬目覚む」 「波のごと 行きつ戻りつ エンジン音」
「隣家の子 母呼ぶ声や 年の暮れ」

1月：新年。

「新年を 祝う花火や 犬吠える」 「若人の 楽器響けり 元日や」
「爆竹の 年新たむる時 迫り来る 嵐のように 大地を揺るがす」
「爆竹の 鳴り響き渡る 新（さら）の街」 「風風て 雲一つなし お正月」
「夢の中 我に寄り添う 初恋の人」 「初富士や 遠き友より 便り来る」
「教え子の 仕事初めや 夢語る」
「下弦の月白し 朝の風冷たし」 「寒き朝 残れる月の 寂しさよ」
「延長を 願い続けて 年を越え」 「何がある あと半年や 胸に秘す」
「残るとも 残らぬもとも 我知らず 何か残れば 幸いかな」

3月：同期で現職参加の2人が先に帰国。残された日がわずかになってきた。

「子どもらと 過ごしし時間 立ち止まり 振り返りつつ 今を思う」

「残されし 日々を惜しみて 子と遊ぶ」
「別れ知らぬ 子どもらの声 常のごと」
「スマホにて 見送る顔に 幸願う」
「雨季来るや 友二人発つ 帰国の途」
「夢見草 過ぎ去りし日を 懐かしむ」



「思い出は
門門にあり
人にあり」

4月：セマナサンタの旅行。

「ベリーズや 夕焼け空に 星一つ」
「記憶にも 残らずも良し 我行かん」
「教え子の 贈りしカバン 旅の友」
「インデヘナ 色鮮やかに アンティグア」
「紫の 花咲き誇る アンティグア」
「香（こう）の香（か）や 花の絨毯 踏み進む」



「人々の 思いを込めて 描かれし」

4月：蝉が鳴き始める。暑い季節の到来。

「雲間より 昇る朝日の 明明と」 「雨あがり 月の光の 冴え渡り」
「雨上がり 薄紅の花 朝の空」 「木々を抜け 嘴の音 届きおり」
「山道や 高温響く 蝉の声」 「汗拭きつ 道端並ぶ ププサ屋前」
「天上と 顔前よりの 熱波にて 何も成せずに 我立ち尽くす」
「雲間より 明かい光の 届きおり」 「我が身にも 射す光あれ 明日思う」
「学舎（まなびや）の 後輩に向け 心にて 幸多かれと 思いは馳せる」

「これまでの 広がり今に 集まりて これから先に また広がれり」

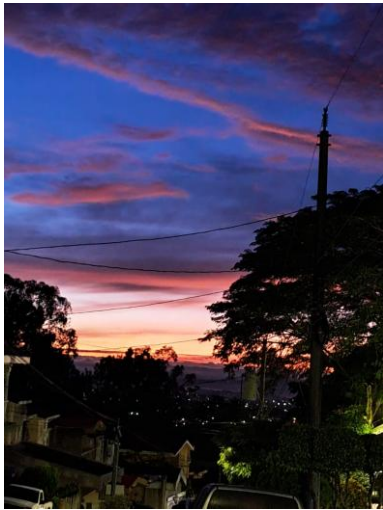


5月：雨季の兆し。

「二年経ち 猫の挨拶 Hola と聞く」
「雨上がり 雲に朝日の 紅み射す」
「夜目覚め 雷鳴聞けば 雨季五月」
「眠る人 通り過ぎる我 朝曇り
(歩道で寝る人を見て、雨の心配をする)」

「五月告ぐ ソンポポデマヨ 闊歩して」

6月：雨季。地震やハリケーンの大雨。



「雲間にて 月を仰ぎて 中休み」
「中休み 涼を求めて 噴水前」
「落つる音 マンゴパパイア アボカドか」
「雨上がり 霧のベールを 纏う街」
「雨、上がり 涼しき街に 歩き出す」
「まどろみに 揺れて始まる 金曜日
風は涼やか 道は渋滞」
「(いつもより遅く目覚めた朝)
雨音に 合わせて届く 鳥の歌」
「(同じく、いつもより遅く目覚めた朝)
義父の声 目覚めて気づく 鳥の歌」
「警報の 朝に涼しき 月浮かぶ」
「目覚ましを かき消す雨や ハリケーン」

「清々し 雨風去りて 紅き朝」

「空の向こう 雲流れゆき 祖国の梅雨」 「山肌の 凸凹映す 朝日かな」
「台風後 公園歩く 蟬時雨」 「炎天下 日本のラーメン 見つけたり」
「雨止みて 鳥の囀ずり 響く街路(みち)」 「太陽を 求め上向く オレンジの華」
「職場の窓 叩く嘴 陽射し浴び」 「金属を 切るがごときや 蟬の声」

6月：サッカーワールドカップ。お世話になった VC さんとの別れ。

「街なかに 朝日と共に Gallo の声」
「信頼の 人の心に 頼る我」
「Hola という 人の笑顔に 救われる」
「晴天や 針なきハチの 群れ飛ぶ庭」
「サッカーの 勝利のニュースや 祖国沸く」

「笠雲に 富士を重ねて 国恋し」



「送り出し 心新たに 人の来る」 「送り出し 次は我が身と 時を待つ」
「活動の 時期が同じき 人たちと 今を境に 逢う由もがな」
「それぞれの道に進めし 人の背を この地にありて 我は見送る」
「脚つって 迎える朝や 集い明け」
「帰国日を 延ばせと求む 仲間たち」 「遠き友 帰国を待つと 便り来る」
「また来むと 一人立ちたる 搭乗口」

7月：祖国を思う気持ち半分、残りの日々を楽しむ気持ち半分。

「月下には 肩を並べて 語り合い」 「月下には 時を忘れて 語り合い」
「バス降りて 別れを惜しむ 二人かな」
「恋人の 国変われども 繋がりとは 何処も同じ 恋人繋ぎ」
「鳥が鳴く 祇園囃子の 練習か」 「若鮎の 祇園祭の 笛を聞く」
「若鮎も 鮎も食べたし 帰国後や」 「山鉦の 軋みを立てて 曲がりおり」
「梅雨空けて 空に沸き立つ 白い雲」
「空 opaco 仕事終わって 急ぎ足」 「夕立に 右往左往の 街の中」
「こそ聞きし dichoso fui や 我が身より」 「2年過ぎ dichoso fue と 友の言い」
「我が身より い出し思いの むばたまの 我に余りて 泪なりけり」
「服をあげ コーヒーを詰め 荷造りす」 「荷物詰め 思い馳せる 故郷へ」
「詰め込んだ 土産の数だけ 人の顔」
「晴れ渡る 空に一筋 白き雲」
「歩きつつ 残されし日々を 数えおり」
「みあぐれば 西に満月 最後の日」
「最後の日 エルサルの湯に どっぷりと」



8月：任期終了。帰国前。

「波の音 時のすぐるを 忘れさせ」
「ラジオから 聞こえる西語 愛おしき」
「街つつむ 稲妻光る 最後の夜」

「朝陽満ち 火山の国の 山と湖（うみ） 我らを包む ごとく佇む」
「日出づる 日出づる国へ 帰る我ら」 「朝日燃え 決意新たに たどる道」

有賀 仁美（あるが さとみ）

2024年8月～2026年8月。JICA海外協力隊として、サンサルバドルでバスケットボールの強化普及活動に従事した。元中学校教員。分からなかったことが分かったり、できなかったことができるようになった時の子どもたちの笑顔が生きるエネルギー。